現代韓国の都市イメージに関する一考察

――「民主と釜山」をめぐって――

田　中　　悟

A Study on the Image of the City in Contemporary Korea:

Democracy and Busan

Satoru Tanaka

抄　　録

韓国最大の港湾都市である釜山は、韓国の民主化の歴史上、運動を先導した中心地の一つに数えられる。ところが、こうした釜山の民主化の歴史は、釜山の都市イメージの構成要素としては決して大きな位置を占めていない。

本論は、そうした点を前提として、現代韓国における「釜山の民主化の歴史」に内在する「問題点」について考察する。これは、「歴史性」の観点から都市イメージ研究へのフィードバックを試みるものであり、あわせて都市史・地方史としての釜山史研究への可能性を指摘しようとする研究である。

キーワード：都市イメージ、現代韓国、民主化、歴史性、地方史

（2009 年 10 月 2 日受理）

Abstract

Busan has been the biggest harbor city in Korea, and ranked as one of the centers in democratization history of Korea. However, the history of democratization is not necessarily important as a component of the city image in Busan. This article argues the problem about the history of democratization of Busan in contemporary Korea. That is also the attempt to feed back the examination into city image studies, and to point out a possibility of the study of Busan history as an urban planning history or a local history.

Key words : city image, contemporary Korea, democratization, historicity, local history

(Received October 2, 2009)

1. はじめに

1. 1 問題設定

釜山と言えば、朝鮮半島の南東に位置し、人口およそ360万人の韓国第二の都市である。韓国最大の港湾都市である釜山は、国際貿易をはじめとする経済面だけでなく、政治面においても、韓国現代史の節目で重要な役割を果たしてきた。とりわけ、1960年の「4.19革命」や1979年の「釜馬民主抗争」といった、韓国の民主化の歴史上重要とされる事件において、釜山は運動を先導した中心地の一つに数えられる。そうした釜山の「民主化の歴史」を記念する施設として1999年に建設された「民主公園」は、釜山・中央公園の一角を占め、山上から市街地を見下ろしている。

ところが、こうした釜山の民主化の歴史は、釜山の都市イメージの構成要素としては決して大きな位置を占めていない。例えば釜馬民主抗争が代表する、釜山の民主化運動史が忘却されているわけではなく、また具体的な民主化記念事業も存在しているにもかかわらず、「民主化」は釜山の都市イメージを構成するキーワードとして上位を占めることはない。それは何故なのだろうか。そしてそのことは、釜山の都市としての性格にどのような特徴を与えているのだろうか。

もちろんそこには様々な説明付けが可能であろう。その中から本論ではさしあたり、民主都市・釜山の象徴として位置づけられる「民主公園」を手がかりとして、現代韓国における「釜山の民主化の歴史」そのものをまず検討し、そこに内在する「問題点」について考察する。次いで、都市イメージの議論から、釜山という都市に対するイメージの現状への説明付けを試みることとする。そして最後に、釜山における「民主化」のイメージ要素の重みについての考察を通して、都市イメージ研究へのフィードバックを試み、あわせて都市史・地方史としての釜山史研究への可能性にも言及したい。

1. 2 都市イメージに関する先行研究

都市イメージ研究とは、主に地理学の分野で研究が蓄積されてきた研究トピックスであり、リンチ（1968）がその嚆矢とされる。それは、ボストン・ジャージーシティ・ロサンゼルスというアメリカの3都市を事例とする研究であり、環境イメージの成分としてアイデンティティ（identity）・構造（structure）・意味（meaning）を析出する（リンチ1968：10-11）[1]。

韓国における都市イメージについて考察を展開している須山・鄭（2006）によれば、このリンチに始まる都市イメージ研究の主要な潮流として、(1) イメージを構成する基本要素の究明を目指し、複数の都市を対象として評定尺度を利用した計量的手法を用いる「都市イメージ構成要素の定量化」を目指す流れと、(2) 特定の場所概念や場所にまつわるさまざまな言語的言説に着目して、テクストの読みを重視する「場所イメージ形成過程の解明」と目指す流れとが指摘できるという。そして須山・鄭自身は、基本的には後者の立場に立ちつつも、テクストの読みに依存したアプローチの「一般性のなさ」を克服すべく、

都市名から連想される単語をテクストとした分析を展開する。「単語に含まれる情報量は少なく、細部にわたる検討は不可能であるが、標準的な手法が確立されれば、イメージ形成過程の地域間比較が可能と」なるからである（須山・鄭 2006：12)。

具体的には彼らは、韓国の主要 27 都市を分析対象とし、江原道春川市に居住する 20 歳以上の 211 名を調査対象者として、評定尺度法と連想法による自由記述によって都市イメージを採集している。そして連想法で得られたデータに対して品詞による分類を採用して、(1) 場所とのつながりが希薄であると考えられる「普通名詞」、(2) 場所との結びつきが濃厚である「固有名詞」、(3) 都市に対する評価の意味を含む「地域性表現」というカテゴリーを設定し、それぞれに「仮想性」「固着性」「全体性」を示す指標とする（表 1 参照)。これらの指標は、場所に対する理解が進展するにつれて仮想性→固着性→全体性と推移するものとされ、その推移の過程が即ちイメージの形成過程であると見なされることになる。

都市名	単語数	回答件数	言語表現様式(%)			出現頻度上位3位の単語(件)								
			普通名詞	固有名詞	地域性表現	単語	分類	頻度	単語	分類	頻度	単語	分類	頻度
慶州	34	222	25.23	64.41	10.36	仏国寺	固	104	遺跡	普	28	新羅	固	12
高陽	35	137	51.82	40.15	8.03	新都市	普	28	花博覧会	固	24	花	普	21
光州	50	175	5.75	81.61	12.64	5.18事件	固	55	民主化運動	固	22	ビエンナーレ	固	16
亀尾	30	159	74.21	14.47	11.32	工団	普	68	工場	普	18	電子	普	14
群山	40	118	72.03	15.25	12.71	港湾	普	49	港湾都市	地	8	サクラ	普	5
大邱	54	202	23.76	56.93	19.31	リンゴ	固	72	地下鉄惨事	固	17	繊維	普	13
大田	63	178	18.54	61.80	19.66	エキスポ	固	60	KAIST	固	11	儒城温泉	固	7
馬山	37	115	34.78	55.65	9.57	アグチム	固	44	工団	普	12	馬山義挙	固	6
木浦	32	197	62.24	33.67	4.08	港湾	普	94	儒達山	固	35	タコ	固	9
釜山	56	237	29.54	60.76	9.70	海雲台	固	58	チャガルチ市場	固	37	港湾	普	28
ソウル	78	238	16.03	29.96	54.01	首都	地	48	複雑	地	15	南山	固	14
城南	48	129	21.71	61.24	17.05	南漢山城	固	25	新都市開発	固	20	盆唐	固	10
水原	49	154	20.78	64.94	14.29	水原城	固	43	カルビ	固	19	城	普	13
順天	46	72	15.28	65.28	19.44	コチュジャン	固	10	麗順反乱事件	固	5	松広寺	固	4
麗水	46	139	47.48	44.60	7.91	梧桐島	固	24	港湾	普	18	海	普	16
蔚山	44	163	52.76	31.90	15.34	工団	普	25	現代	固	16	現代自動車	固	16
原州	51	179	15.64	58.66	25.70	雉岳山	固	85	軍事都市	地	9	軍人	普	6
益山	45	87	32.18	57.47	10.34	弥勒寺跡	固	14	弥勒寺跡石塔	固	11	裡里駅	固	4
仁川	59	203	41.87	48.28	9.85	月尾島	固	45	港湾	普	28	空港	普	19
全州	24	169	4.17	86.90	8.93	ビビンパ	固	138	飲食	地	3	テサスムノリ	固	3
済州	43	252	28.97	43.25	27.78	観光地	地	37	漢拏山	固	34	みかん	固	34
晋州	48	111	21.82	67.27	10.91	論介	固	34	直石楼	固	8	サクラ	普	7
昌原	36	115	68.70	13.04	18.26	工団	普	45	工場	普	11	工業都市	地	7
天安	27	167	28.14	62.87	8.98	クルミ菓子	固	61	三叉路	普	30	天安三叉路	固	16
清州	49	112	25.45	13.64	60.91	教育都市	地	36	教育	地	14	街路樹	普	5
春川	45	265	24.53	43.77	31.70	湖畔の都市	地	52	ダッカルビ	固	38	湖水	普	24
浦項	39	182	51.10	46.15	2.75	浦項製鉄	固	53	製鉄	普	24	製鉄所	普	16

分類：　普＝普通名詞、固＝固有名詞、地＝地域性表現　　（アンケートより作成）

［表 1］分析対象都市における連想語の言語表現様式（須山・鄭 2006:25）

本研究は、釜山の都市イメージに注目する個別事例研究をさしあたりは志向するものであり、須山･鄭のように「標準的な（研究）手法の確立」を目指すわけでは必ずしもない。ただ、こうした先行研究を踏まえることで、テクストの読みに依存した研究の「特殊性」をあらかじめ自覚し、その上で本研究を進めていきたいと思う。単語に基づくテクスト分析は確かに手法の標準化としての可能性を有しているが、だからといって情報量を絞り込んだそのような手法が、文章テクスト分析の代替手法として全面的に採用できるわけでは

ない。では本研究は、文章テクストの読みを扱う中で、「手法の標準化」に何をフィードバックできるだろうか。この点について、全体を通じて考えていきたい。

1. 3　考察の構成

釜山の都市イメージを構成する要素としての民主化の歴史を考えるにあたって、本研究では二つの時期に考察のポイントを絞りたい。一つは1960年の「4.19革命」、もう一つが1979年の「釜馬民主抗争」である。これらの事件はともに韓国現代史の大きな転換点として人々に記憶されているだけでなく、その中心地の一つが釜山であった点が共通する。

そのような「釜山の民主化の歴史」イメージを考察するためのテクストとして、社団法人釜山民主抗争記念事業会が運営する「民主公園」ホームページに掲載されている「釜山民主運動史」を主として用いることにする[2]。民主化運動を記念し、その歴史の継承を目指す「民主公園」の立場から編まれたテクストは、都市イメージの構成要素としての「民主化」の形成過程とその内容を直接反映した資料であると考えられる。

なお、このテクストの読み解きを進める際には、1960年・1979年と釜山とともにこの地域の民主化運動の中心地となった馬山と、1980年の光州事件を通じて「民主の都市」としての都市イメージを確立している光州という両都市の事例を適宜参照しつつ、議論を進めることとする。

2.　4.19革命と釜山

2. 1　4.19革命とは

ここで言う「4.19革命」とは、1960年3月に行なわれた第4代大統領選挙における李承晩（イスンマン）政権の大規模な不正行為に反発した学生や市民による民衆デモによって、李承晩大統領が下野した事件を指す。まず、この事件の経過について簡単にまとめておきたい。

1960年3月15日に予定されていた大統領選挙をめぐる抗議デモは、まず2月28日、野党の有力な支持基盤となっていた韓国有数の政治都市・大邱で発生した。野党・民主党の遊説に学生が参加することを阻止するため、日曜日であるにもかかわらず登校の指示が出されたことに対して、慶北高校・大邱高校・慶北高女・師大附高の高校生が街頭デモに繰り出し、警察と衝突して一時は250名が連行された。

この大邱のデモは全国に波及し、3月5日にはソウル、8日には大田（テジョン）、10日には清州（チョンジュ）・水原（スウォン）など全国の主要都市で学生が街頭デモを行なった。そして迎えた15日に実施された大統領選挙は、官憲を大々的に動員した文字通りの〈不正選挙〉であった。この日、この不正選挙の無効を叫んで街頭デモに繰り出した学生・市民が警察と激しく衝突したのが、慶尚南道の馬山（マサン）であった。馬山ではこのとき警察の発砲によって7名が死亡し、一時はデモも鎮静化の方向に向かったが、4月11日、行方不明になっていた馬山商業高校の学生・金朱烈（キムジュヨル）が目に催涙弾を打ち込まれた凄惨な遺体で発見され、再び馬山市民の怒りが爆発した。この事件に端を発した馬山の市民・学生の街頭デモは全国的な反政府機運を呼び、4

月 18 日にはソウルの高麗大学校で学生がデモに立ち上がった。この高麗大学生のデモを皮切りに、翌 19 日にはソウルのほぼすべての大学で学生が決起し、市民とともに 10 万人規模のデモが光化門広場を埋めた。このデモ隊に対して警察が発砲し、「血の火曜日」と呼ばれる流血の事態となった。こうしたデモは 19 日のうちに全国に波及し、大邱でも慶北大・青丘大などの学生が数千名規模のデモを展開するなどした。死者はソウルで 100 名を越え、全国では 186 名を数えた。このため、ソウル・大邱・釜山・光州・大田に戒厳令が敷かれ、戒厳軍が出動する事態となった[3]。

ここに至って李承晩は、副大統領候補・李起鵬（イギブン）の当選取り消し・拘束学生の釈放などの融和策に転じたが、25 日になって全国 27 大学の大学教授がソウル大学校に会して「時局宣言文」を出し、学生に同調してデモに及んだ。この大学教授団のデモが決定的な一撃となり、李承晩は翌 26 日、退陣に追い込まれ、5 月 29 日にフランチェスカ婦人とともにハワイに亡命した。

以上が、1960 年に起きた「4.19 革命」の概略である。こうした流れを踏まえて、次に「釜山の 4.19 革命」はどのようなものだったのかについて検討してみたい。

2. 2　釜山と 4.19 革命

高台にある「民主公園」を訪れると、その入り口に当たる位置に、高さ 11 メートルの「四月民主革命犠牲者慰霊塔」が立っているのがまず目を引く。その場に設置された説明板によれば、この石塔は、1960 年の「4.19 革命」における犠牲者の犠牲精神を褒め称えるべく、釜山市民の寄付によって 1962 年に龍頭山公園[4]に建てられたものである。そしてその慰霊塔が 2007 年 2 月 15 日、英霊奉安所（73 平方メートル）の建立とともに民主公園入り口のこの地へ移転し、現在見られる姿となったのである。英霊奉安所には、釜山の「4.19 革命」犠牲者 34 名（2009 年 3 月現在）の遺影が「四・一九革命犠牲者霊位」という大きな位牌とともに掲げられ、午前 10 時から午後 3 時までの開館時間中は管理人が常駐している。

［写真 1］「民主公園」全景
左下に「四月民主革命犠牲者慰霊碑」と「英霊奉安堂」とが見える。

こうした犠牲者が生み出された釜山では、1960 年の「4.19 革命」はどのような展開をたどったのだろうか。

「民主公園」サイト内に掲載されている「釜山民主運動史」は、その第 4 章を「四月革命と 1960 年代の釜山地区民主化運動」に充てている。その記述などを参考にしながら、「釜山の 4.19 革命」について概観しておくことにする。

釜山ではまず1960年3月7日、「公明選挙」を訴えた学生集会が警察によって解散させられた。だが、12日には海東高校の学生が街頭デモを行ない、14日には東莱高校・港都高校・釜山商高・テレサ女高などの高校生が700人規模の連合デモを行なっている。

釜山の運動が本格的に盛り上がったのは、4月18日、東莱高校の学生1000名余りが市内に繰り出し、内陸の東莱から南の釜山市中心街へ向けて警察の防衛線を次々と突破して、デモを展開したのがきっかけであった。彼らのそのときのスローガンは「学園の民主主義の保障」「インチキ選挙の拒絶」および「馬山学生殺害事件の徹底的な究明」であった。そのいっぽうで、こうした高校生のデモに比べると、東亜大・釜山大などの大学生の動きは、学校当局の抑圧もあってこの時点ではまだ鈍かったとされる。事実、釜山大学校では4月19日当日も、前日よりバリケードを築いて座り込みを続けていた学生を排除しつつ、平常通りの講義が行われていた。

そのような状況の中で4月19日午後、市内を練り歩くデモ隊に対して警察が発砲し、凡一洞や釜山鎮で数名ずつの死者と数十名の怪我人とが出た。これに激高したデモ群集は釜山鎮警察署を占領し、これを破壊するとともに警察車両数台を焼いた。

このようなデモが全国的に激しくなってきた情勢を受けて、李承晩政府は19日午後1時にソウル地区に対して警備戒厳令を宣言していたが、午後5時になってソウル・釜山・大邱・大田・光州の5都市に非常戒厳令を宣言した。これによって戒厳司令官は、この5都市の行政・司法を管掌することになったのである[5]。釜山市内でも戒厳軍が展開するとともに、4月20日からは国民学校・中学校・高校・大学などが休校となった。だが、そのような中でも釜山における李承晩政権糾弾のデモは収まったわけではなく、デモ隊と警察との衝突はなおも繰り返されていた。そしてこの間、4月24日には李承晩が自由党総裁を辞任し、李起鵬も副大統領当選を辞退した。さらに25日には、李承晩政権終焉の決定打となった大学教授団のデモが、ソウルで行なわれた。釜山でも26日には、東亜大学校の学生・教授が、「この地に生を享けた国民よ、民主祭壇に血を捧げようという力強い叫びに歩調を揃え、明日のために総決起せよ」といった決議文とともに市内をデモ行進し、市民は歓呼の声でこれに応えた。26日のデモ参加者はソウルで30万人、釜山で20万人、全国では70万人に達したとされる。釜山のデモは翌27日・28日頃に絶頂に達し、警察署が破壊されるなどしたが、李承晩の下野もあってこれ以後は秩序回復の動きが進んだ。もっとも、民主党政権の混乱や発砲責任者の処罰要求を理由とした学生のデモは、大邱や釜山などの一部地域では5月上旬まで続いた。

2.3　民主化運動と釜山（1）――馬山との対比において

さて、以上の歴史的な流れを確認した上で、「4.19革命」において釜山という都市がどのように位置づけられるかを考えてみたい。

「4.19革命」を論じるとき、そのターニングポイントとしてしばしば言及されるのは、「2.28大邱」であり、「3.15馬山」であり、そして「4.18高麗大」である。大邱のデモは高校生が政府糾弾に立ち上がった最初の事件であり、馬山は選挙当日に不正糾弾ののろしを

上げた都市として、また高麗大の学生デモはソウルの学生・市民が政府打倒に立ち上がる先駆けとして、それぞれ長く記憶されることになった。

では、釜山はどうだろうか。

少なくとも明らかなのは、この当時の釜山での運動は、運動の〈先陣〉からは常に一歩遅れて展開していることであろう。まず、事態を先導した高校生のデモは2月28日に大邱で始まり、3月になって全国へと波及する中で釜山でも行なわれた。また3月15日の大統領選挙に始まる不正選挙糾弾デモは、最初に馬山で二次にわたって発生し、そこから全国に拡大した。これに釜山で呼応したのは、なお主として高校生たちであった。さらに4月18日、高麗大学生が口火を切った学生デモは、19日になって全国の大学へと広がっていったが、東亜大・釜山大など釜山の大学はやはりその動きに一歩後れを取っていた。釜山のデモが最高潮を迎えたのは、教授団声明が出され、李承晩大統領が退陣に追い込まれた26日以降だったのである。

こうしたことを考えてみると、「4.19における釜山」がどのような位置づけにあったかが見えてくる。それは、〈革命の先駆け〉ではなく、「朝鮮戦争当時の臨時首都であり、韓国第二の都市である釜山にも、抗議行動が波及した」という意味で、事態が一都市一地方の問題にとどまらぬ全国規模の問題であることを世間に知らしめる、〈革命の裏書人〉としてのポジションである。例えば、大統領選挙に端を発する3月15日と、その日行方不明になっていた金朱烈の凄惨な遺体が発見された4月11日、この二次にわたるデモに渦巻く馬山の学生・市民の怒りは、18日の釜山・東莱高校生のデモに掲げられたスローガンの一つ「馬山学生殺害事件の徹底的な究明」へとつながり、不正糾弾という事態が全国的規模へと拡大していく契機となっていった[6]。馬山の「3.15義挙」と「烈士(ヨルサ)[7]・金朱烈」とが「4.19革命」において特別な地位を占めているのは、この事実関係ゆえのことである。ソウル特別市城北区にある国立4.19民主墓地には、ソウルだけでなく釜山・馬山・光州といった都市で犠牲になった人物も埋葬されているが、馬山についてはそれとはまた別個に国立3.15民主墓地が整備され、金朱烈をはじめとする馬山の犠牲者たちはその両方に墓域を有している。

要するに、釜山の「4.19革命」は、革命の主役ではなく、周辺的な位置にあったと理解することができよう。最初の犠牲者を出した馬山、政変の現場となったソウルに比べて、「4.19」における釜山の重みは、相対的に低いものとならざるを得ないのである[8]。

では、この「4.19」とは逆に、釜山が全国的な運動の先駆けとなった1979年の釜馬民主抗争については、どのようなことが言えるだろうか。次章で考えてみたい。

3. 釜馬民主抗争と釜山

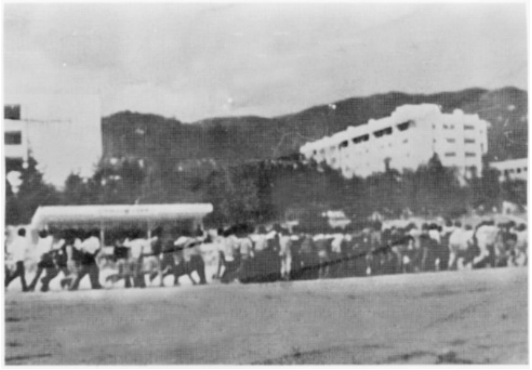
3. 1 釜馬民主抗争とは

「4.19革命」の後に成立した第二共和国・民主党政権を1961年の5.16クーデタで崩壊に追い込んだ朴正熙(パクチョンヒ)は、そこから18年の長期にわたって権力を維持した。だが、その政

権後期―― 1972年のいわゆる「維新クーデタ」以降は、反政府・民主化勢力に対して強硬策をもって臨み（1973年の金大中拉致事件はその象徴である）、そうした弾圧がさらにこれらの運動に正統性を与えるという悪循環に陥っていた。朴正熙政権のこのような〈行き詰まり〉は、周知のように1979年10月26日、中央情報部長・金戴圭による朴正熙暗殺によって終止符が打たれることになる。そしてこの暗殺事件の背景にあったのが、当時の韓国の最大野党であった新民党総裁・金泳三が与党議員の決議によって国会議員を除名された事件であり（金泳三総裁議員職除名波動、1979年10月4日）、この事件を引き金として金泳三の地元である釜山および隣接の馬山で学生・市民が大規模な抗議デモを展開した「釜馬民主抗争」であった。

3. 2　釜山の1979年10月

10月4日の金泳三国会除名決議以来、釜山では断続的な抗議活動が続いていた。だが通常、「釜馬民主抗争」の開始は、10月16日、釜山大学校で始まったデモであるとされる。前日15日のデモ計画が不発に終わっていた釜山大学校では16日午前10時、まず数百名が集まって校内デモが行なわれた。これらの学生デモ隊はその後、昼頃には南浦洞・光復洞といった釜山の市街中心地に進出した。ここに東亜大学校･高麗神学大学（現･高神大学校）の学生らも合流して2000人から3000人規模となった彼らは、警察との衝突を繰り返した。そこに合流する市民もあって、5万人規模に膨れ上がったデモは、夜間にかけて続けられた。



［写真 2］釜馬民主抗争における釜山大学校の学生デモ

翌17日には、釜山大学校が臨時休校となり、市内各所には機動隊が配備されて警戒態勢を取っていたが、釜山大学校旧正門前に集結した釜山大学生1000余名は前日と同様に市内進出を図り、東亜大学校でも2000余名の学生が校内デモを展開した後、市内のデモに参加した。彼らは数十の分隊に分かれ、前日のデモが行なわれた中区だけでなく、周辺の東区や西区にも進出して、派出所・警察署・公共機関などを対象に投石などを行なった。

こうした釜山のデモ拡大を見て、朴正熙政権は18日午前0時をもって釜山地域に非常戒厳を宣言し、空輸部隊2個旅団を投入した。それでもなお、18日にも2000人規模のデモ隊が南浦洞や市庁前に展開したが、投入された軍部隊によって鎮圧された。ここに、3日間にわたってデモを繰り広げた釜山の学生･市民は、再度の沈黙を強いられたのである。また、18日の慶南大学校に始まる馬山のデモは、翌19日にかけて高校生や市民も参加した「民衆抗争」の様相を呈したが、これもまた馬山・昌原地域への衛戍令の発令と軍の出動によって、20日には終結を迎えることになる。

3. 3　民主化運動と釜山（２）――光州との対比において

さて、それ自体はごく短期間で終結を迎えた釜馬民主抗争を、〈民主都市・釜山〉を称揚する立場にある「釜山民主運動史」はどのように評価しているだろうか。

この点に関して、釜馬民主抗争について述べた第５章第３節の第３項「釜馬民主抗争の性格と歴史的意義」の中では、次のように述べられている。

> 上に見たように、釜馬抗争は朴正熙政権の軍兵力投入と暴力的鎮圧によって短期間の局地的抗争で終わった。だが釜山・馬山の民衆と学生たちが展開したこの抗争の波紋が単純にそれで終わってしまったのではないという点は、明確に評価されねばならない。すなわち釜馬抗争は、10 月 16 日の梨花女子大デモと 19 日の全南大およびソウル大のデモ、そして 24 日の啓明大デモなど全国の大学へ拡散していく兆しを見せた維新末期反独裁抗争の巨大な中心へとせり出し、その渦中の権力内部的暗闘を激化させて、（朴正熙暗殺の）10.26 事態と朴政権没落の決定的契機として作用した。その一方で、釜馬抗争自体は軍兵力投入を通した武力鎮圧で一段落したこともあって、朴政権の没落は権力内部の暗闘とかみ合わさった 10.26 事態を媒介としてのみ――間接的にのみ起き得たという点また、厳然たる事実である。そして、抗争のそのような間接的成果もまた、結局は全斗煥ら新軍部による陰謀的クーデタで簒奪されてしまう運命となった。それは、権力の反民主的暴圧と収奪構造に対する民衆の抵抗が、権力の前にまたもや再び後退してしまったという、不幸な私たちの現代史の再度の反復だった。　（「抗争の帰結」）

ここで述べられているのは、主として「運動の先駆けとしての釜馬民主抗争」と朴正熙暗殺の「10.26 事態」との関係如何という問題である。確かに、釜馬民主抗争は全国的な反政府機運の到来を告げたし、釜山・馬山の事態への対応をめぐる政府内部の亀裂（流血事態を避けようとする金戴圭中央情報部長と、強硬策を主張する朴正熙大統領・車智澈（チャジチョル）大統領警護室長との間の意見対立）が「10.26 事態」を呼んだ、というのは韓国現代史上の定説とされている（木村 2008：164-165）。しかし他方、学生・市民による直接的な影響力の行使ではなく、政権内の権力抗争の結果としての金戴圭による〈暗殺〉という形でしか、朴正熙政権の崩壊は起きなかった。しかも、その後に到来したいわゆる「ソウルの春」は、「新軍部」による二度のクーデタ（1979 年 12 月 12 日と 1980 年 5 月 17 日）を経て、一年と経たずに全斗煥の軍事政権の発足へとつながっていった。その意味で、1960 年の「4.19 革命」がしばしば「未完の革命」と言われるのと同様に、1979 年の釜馬民主抗争もまた「未完の抗争」であると考えることができよう。

ところで、この「未完の抗争」自体は、1987 年の六月抗争による民主化によって〈完成〉を見ることになる。だがその前に、釜馬民主抗争に始まった流動的政局は、場所を違えた光州の地で、悲劇的な小括を迎える[9]。言わずと知れた「光州 5.18」である。

1980年5月17日、戒厳令が済州島を含む全土に拡大され、全斗煥ら新軍部勢力は金大中をはじめとする政治家・学生運動指導者・労働組合幹部、また金鐘泌など旧政権幹部を一斉に逮捕した。金大中の逮捕は、彼の地元である全羅南道･光州の人々を大いに刺激し、彼の釈放を求める学生・市民の抗議運動をもたらした。それは、わずかに7ヶ月前、金泳三の国会除名によって釜山・馬山で起きたことの再現であった。違ったのは、新軍部側が釜馬抗争の結末を知っていたということである。釜山・馬山の「騒乱」を発端として朴正熙の長期政権が崩壊したという事実を知る彼らの、「光州事件」への対処は、過酷を極めた（木村2008：179）。5月18日から27日にかけて、光州では学生・市民の抗議活動に対する徹底した鎮圧が進められた。それに対抗して武装した市民軍の立てこもった全南道庁が陥落するまでの過程において、少なくとも200人以上の死者･400人以上の行方不明者･5000人以上の負傷者が出たとされており、その正確な数は今なお不明のままである。

こうした光州の事態に対して、同じ頃、すなわち1980年5月の釜山の状況はどうだったのであろうか。

> …新軍部集団のクーデタの可能性に対する憂慮の中で、いよいよ5.17非常拡大戒厳措置が発動されると、これに対抗して全国的に広範な闘争が展開される。特に光州では、全南大学校の前の投石戦が契機になって、学生を含んだ光州地域の全市民と、新軍部集団の代理人として出動した軍人らが、武力衝突することになった。釜山でも、釜山大学校前の散発的なデモが、たとえ爆発的に成長することはなかったとしても、全南大のデモの様相と同様に展開した。……釜山でも､もう一つの小さな「光州抗争」を展開したのだ。
>
> （第6章「新軍部体制下1980年代釜山地域民主化運動」第1節「概観」）

確かにそれは、もう一つの小さな「抗争」であったかも知れない。だが、全国的に展開したデモによってソウルをはじめ各都市で死者を出した1960年の「血の火曜日」とは異なり、1979年から1980年の政局において、軍の弾圧によって死者を出したのはほとんど唯一、光州のみであった。そして金大中は、背後で人々を操り、光州事件を引き起こした内乱陰謀事件の張本人とされ、死刑判決を受けるに至った（のち出国・亡命）。1979年から1980年の政局がこうして「光州」という一都市へと収斂していったことが、1980年代以降、反政府・民主化運動の中で「光州」が取り分けて重要なキーワードと化していく条件であったのである。かくして､「5.18の光州」「民主の光州」というイメージはこのとき、全国的に定着を見せることになる。

このような「光州の死者たち」「金大中の死刑判決」を前にすれば、一連の政局の中で死者を一人も出さなかった釜山、そして抗議の断食によって生死の境をさまよったとは言え、逮捕を免れて自宅軟禁処置にとどまった金泳三の、「民主化」に対する印象は、相対的に薄まらざるを得ないのである[10]。「歴史的イメージ」が過去に対する後世のものである以上、こうした条件が〈民主釜山〉という都市イメージには不利に働くであろうことは

想像に難くない。

ここまで、釜山の民主化運動史に内在する〈問題〉について検討してきた。続いて、そうした民主化の歴史に外在する釜山の都市環境に目を向けてみたい。そもそも釜山とはどのような都市であり、釜山の民主化とはその中でどのように位置づけられるのだろうか。

4. 釜山の都市アイデンティティと都市構造

4. 1 民主公園と中央公園

これまで本論でしばしば言及してきた民主公園であるが、その周辺の公園地帯はもともと「大庁（テチョン）公園」と呼ばれていた。朝鮮戦争当時、避難民が集落を築いて暮らしていた大庁山一帯が、1970 年に公園地域として指定されたのがその始まりである。その後、1986 年に大庁公園と北方に隣接する大新（テシン）公園とを併せ、「中央公園」として一括して管理されるようになった。民主公園は、旧大庁公園敷地内で 1997 年に造成工事が始まり、1999 年に開所した。したがって、「民主公園は、中央公園の一部として旧大庁公園の敷地内に立地する」といういささか複雑な関係になっている。

また、民主公園建設にあたっては、社団法人釜山民主抗争記念事業会が主導的な役割を果たしており、現在はその運営管理も事業会が引き受けている。その運営管理の範囲は、「民主の松明」と題する象徴造形物を中央部に据え、中小の劇場スペース・常設展示室・企画展示室・屋上展望台などを備えた複合施設である「民主抗争記念館」を中心に、4.19 革命犠牲者慰霊塔および英霊奉安所、野外劇場、「民主の名」と題した追慕造形物、樹木園などからなる。さらにその周囲（旧大庁公園エリア）には桜の木が植わり、緑に囲まれた散策路が設けられているほか、中央図書館や彫刻広場などもあって、釜山市民にとって身近な憩いのスペースとして親しまれている。

ただ、「民族の魂と文化が生きて息づく史跡公園」（釜山広域市施設管理公団発行の中央公園パンフレットより）である以上、ここには民主公園以外にも、それ相応の施設が立ち並んでいる。

まず、民主公園と向かい合う形で北側に聳え立つのが、高さ 70 メートルの巨大な忠魂塔である。この忠魂塔は 1983 年に建立され、朝鮮戦争などで戦死した釜山出身の陸海空軍の軍人や警察官ら 9287 位（2009 年 2 月現在）を祀る慰霊塔である。また、忠魂塔から見て民主公園の裏手に当たる南の位置には、朝鮮戦争において北朝鮮艦との釜山沖夜間

［写真 3］忠魂塔

交戦で勝利したことを記念して海軍第3艦隊司令部が1988年に建立した「大韓海峡戦勝碑」（高さ4.5メートル）があって、軍関係の両施設が民主公園を挟む形になっている。また、民主公園の西側には、1876年の釜山開港から1945年の「光復」に至るまでの釜山地域の抗日運動や釜山地域出身の抗日運動家を記念すべく2000年に開館した「釜山光復記念館」がある。ここには、3.1独立運動など釜山地域における抗日運動の展示室があり、いわゆる「愛国志士」の位牌を奉安するなどしている。

こうした多様な歴史記念施設が立ち並ぶ旧大庁公園エリアを訪れる人々の中には、多少なりとも戸惑いを覚える者もいるはずである。

それは、何に対する戸惑いなのだろうか。

例えば、「光州事件」の犠牲者が埋葬されている光州広域市の国立5.18民主墓地のことを考えてみよう。この民主墓地が、国軍墓地をルーツとする顕忠院と同じ敷地内に存在するという図を想像できるだろうか。

［写真4］大韓海峡戦勝碑

それはなかなか困難な作業である。というのも、1980年、光州の学生・市民の抗議活動に対して過酷な鎮圧作戦を展開したのは、他ならぬ国軍部隊であったからである[11]。

事実、韓国の国立墓地には、戦死した軍人や警察官・殉職公務員・国家有功者などを対象にした顕忠院（ソウル・大田）・護国院（利川・永川・任実）と、民主化運動において亡くなった人々を対象にした国立民主墓地（ソウル・光州・馬山）という2つの系統があるのだが、これらは相互に地理的な距離をおいて立地している。そのことを念頭に置きつつこの旧大庁公園エリアを眺めると、忠魂塔や戦勝碑と民主公園とが大した摩擦もなく同居しているという、その特異性が浮き彫りになってくる。

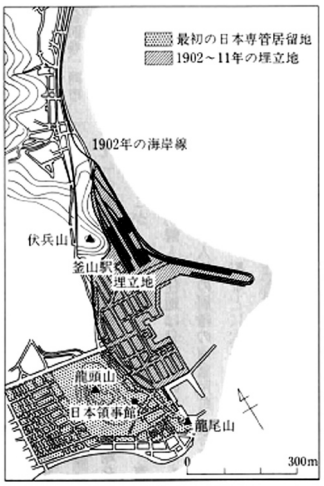
理由はいくつか考えられる。朝鮮戦争において、臨時首都として大韓民国最後の砦となった釜山では、その戦争の苦難の記憶が他の都市よりも鮮明に刻み込まれていること、また釜馬民主抗争において、軍による弾圧はあったものの、それが光州のように多数の死傷者を出す惨事には至らなかったこと、などが挙げられよう。ただ、学生市民と軍とが明確に対峙する構図が成立した光州に対し、釜山ではその対立構図に鮮明さの欠けるところがあった点は、少なくとも指摘できるだろう。それ故に、軍関連記念施設と民主化運動記念施設とが同居する旧大庁公園のような空間が成り立つのであり、その一方で釜山の民主化運動を語ろうとするとき、光州をめぐる民主化運動の語りのような〈ピュアさ〉、別の言い方をすれば〈友敵の鮮明さ〉には欠けることになってしまうのではないだろうか。

4. 2　近代都市・釜山の形成史とその都市イメージ

山頂に建てられた民主公園は、それ自体は〈民主化の現場〉ではない公園内に立地する歴史記念施設である。では、民主化運動の現場となったのは、どのような場所なのであろうか。

東莱高校から始まった4.19革命のデモにせよ、釜山大学校から始まった釜馬民主抗争にせよ、デモ隊が目指したのは釜山鎮から南、とりわけ当時の釜山市庁があった南浦洞一帯であった。龍頭山の南に広がる南浦洞・光復洞界隈は、当時も現在も釜山第一の繁華街であり、チャガルチ市場・国際市場などで広く知られた観光地にもなっている。

ところで、この一帯は近代になってから、より具体的には1900年代から30年代にかけて、数次にわたって行われた埋立工事によって現在の地形になったものである。龍頭山付近は江華島条約（1876年）に伴う釜山開港以来、日本人居留地となり、元来は内陸の東莱から釜山鎮あたりが中心であったこの地域は、日本による開発によって釜山鎮以南、龍頭山周辺の埋立地へと中心地を移し、釜山港・釜山駅・チャガルチ市場などを含んだ近代都市・釜山を形成していった。



［図 1］釜山（1911年）（橋谷 2004:16）

1876年2月27日の江華島条約が締結された以降，開港と共に全国各所で集まってきた商人たちが現在の瀛州洞のトンネルの上に定着することによって町ができ、1889年11月12日に現在の大庁路～旧美花堂デパート間の道路が開設されると共に松現山（現在の龍頭山）を中心に、その当時からの都市の形態をした町が形成された。

1908年4月1日に京釜線の起点が草梁駅から釜山駅に移され、1910年10月30日に釜山駅舎（1953年火災で焼失）を竣工し、第一埠頭まで鉄道を附設し、名実を伴う東洋の屈指の貿易港として先立つようになった。

また、1909年から1912年3月8日まで営繕山の鑿平工事で現在の中央路が形成され、中央洞4街、大庁洞1～2街地域26,723坪を埋め立てることになり、南浦洞一帯に砂利が多い海を埋め立てて宅地を造成し、商店街地域として呼ばれつつ、釜山と慶南一帯の魚介類の供給の地域として有名になった。[12]

現在の行政区では釜山広域市中区に当たるこの地域は、釜山の都市イメージにおいても今なお核心的な存在であるが、そこからイメージされるのは圧倒的に「海港都市としての釜山」、すなわち貿易港・旅客ターミナルとしての釜山港、水産資源の供給地のとしてのチャガルチ市場である。それらのイメージは、植民地時代からの都市形成史に基づいて広く浸

透し、強固な釜山イメージを築き上げている。この釜山イメージは、朝鮮戦争によって臨時首都となり、朝鮮半島全土から避難民が集中して都市人口が急増した後も基本的に変わらなかった。つまり、光復を経ても、朝鮮戦争を経ても、そして独裁と民主化の時代を経ても、釜山の都市イメージには基本的に変化が見られないのである。

［写真 5］現在の南浦洞
左手前：チャガルチ市場ビル、
右奥：釜山タワー（龍頭山公園）

例えば、京城からソウルへの転換は、朝鮮総督府の所在地から大韓民国政府の首都へという根本的な変化を意味していた。浦項であれば、製鉄所建設の前後に決定的とも言える都市イメージの断絶が指摘できる。光州であれば、当時唯一の流血の惨事となった光州事件によって、軍事政権と対峙する民主化運動において第一の焦点の地と化し、その都市イメージが大きく書き換えられたと考えられる。しかし釜山には、光復によっても、経済成長によっても、民主化運動によっても、そのような都市イメージの根底的な変化や転換を見出すことができないのである。

「民主化」が釜山の都市イメージを構成するキーワードとして上位を占めることがないという、その根本的な理由には、こうした都市イメージの形成史の特性が大きく関わっていると考えられるではないだろうか。

5. おわりに――新たな都市史構築の可能性

以上の考察を踏まえて、本論が都市イメージ研究に何をフィードバックできるのかをまず考えてみたい。

先に見たように、韓国における都市イメージの構成と形成過程に関する先行研究である須山･鄭（2005）は、アンケート調査によって得られた各都市に関する連想語を普通名詞･固有名詞・地域性表現に分類し、それぞれに仮想性・固着性・全体性という性質を当てはめた。そしてそれらの連想語は、場所に対する理解が進展するにつれて、仮想性→固着性→全体性と推移するものとされ、その推移の過程が即ちイメージの形成過程であるとされていた。

だが、本論での検討が示唆するのは、そうした連想語に見出しうる〈都市イメージの歴史性〉の問題である。それぞれの連想語が各都市と関係づけられる背景には、その間を結びつける〈歴史〉がある。そこに見出しうる〈差異〉や〈変化〉は、連想語の表面的な属性を超えて、都市イメージの形成過程に少なからぬ影響を及ぼしているのではないだろう

か。言い換えれば、都市イメージが形成される過程において作用するとされる「場所に対する理解」は、単純な「進展」というよりも、歴史的文脈上における変容や他との差異化の過程としてとらえ直される必要があるのではないだろうか。例えば、ソウルであれば、朝鮮時代から大韓帝国、韓国併合と植民地時代を経て大韓民国に至る朝鮮半島の近現代史の文脈上において、その都市イメージが形成されている。また光州であれば、とりわけ1980年代以降は、光州事件を媒介にした民主化運動史の文脈上において、その都市イメージの核心部分が形成されていると言えよう。そして釜山は、光復や戦争や民主化といった変化を超えて、海に面した近代都市として、「朝鮮半島の近代化」という歴史文脈において、その都市イメージが形成されているのである。

都市に関する連想語に「仮想性から固着性を経て全体性へ」という図式を単純に当てはめる分析手法は、それぞれの連想語に込められた〈歴史性〉、その形成と変容の過程を閑却していると指摘せざるを得ない。須山・鄭の研究は、単語に含まれる情報量の少なさについては自覚的であったが、この点に関する言及はなかった。ソウル・釜山・光州という3都市を比較するだけでも明らかに見えてくる、〈都市イメージの歴史性〉という要素を考慮に入れずして、「イメージ形成過程の地域間比較」を進めるとすれば、その手法の「標準化」の過程においてこうした〈歴史性〉の欠落は必ず問題となってくるだろう。

では、そのような〈都市イメージの歴史性〉を相互比較の俎上に載せるにあたって、本研究から具体的には何をフィードバックできるだろうか。

一つ指摘できるのが、ナショナルヒストリー（民族史／国民史）との関係性である。「個人の経験よりは、歌謡や映画、教育によって構築された共同の幻想」としての「多くの人々に共有される物語」（須山・鄭 2005：24）たるナショナルヒストリーが都市イメージの中に含まれるとき、国民の間で共有されているそれは、都市イメージを大きく規定するはずである。仮にそうならないケースがあるとすれば、それはどのようなものであるだろうか。

論理的には2つの場合が考えられる。ナショナルヒストリーの要素以外にも多くの要素が都市イメージの中でひしめき合っていて、他の要素を圧倒することができない場合と、ナショナルヒストリーの要素そのものの力が貧弱で、他の要素を圧倒することができない場合である。敢えて分類するならば、前者の事例がソウルであり、後者の事例が釜山だと言えよう。ソウルがナショナルヒストリーにおいて圧倒的な存在感を持っていることは言うまでもないが、その一方でそれ以外の要素も際立って多く抱え込んでいるのが1000万都市・ソウルである。また釜山は、ナショナルヒストリーにおいてそれなりに重要な位置にはあるが、総体としてネイションに対するインパクトには欠ける面があって、そうした要素が都市イメージの前面には出てきにくい[13]。そしてこれら両都市の対極にあるのが、ナショナルヒストリーにおいて強烈なインパクトを持ち、その他のイメージ要素が比較的に貧弱である光州であろう。以上のことから考えれば、ナショナルヒストリーに関係する都市イメージ要素の強度と占有度は、国民国家内における都市イメージを考察・比較するに当たって、示唆を与える一つの手がかりとなるのではないか。

そして最後に、上記の示唆的提起に関連して、釜山という事例そのものから導出される

展望を一つ述べて、本論のまとめに代えたい。それは、「都市史もしくは地方史としての釜山史」の可能性である。

記念事業の存在にもかかわらず、釜山の民主化運動史が釜山の都市イメージにはそれほど大きな影響を与えていないというのは、それ自体の歴史的意義とは別個に、一つの事実である。釜山の都市イメージの中心は、海雲台にしろ、チャガルチ市場にしろ、釜山港にしろ、開港以来の近代化の歴史の刻印を受けた港湾都市・臨海都市としてのそれである。そのような「近代釜山の都市のなりたちは､民族的立場と意思が完全に無視されるなかで、日本の必要により、又、その力で推進されていった」という「過去の都市形成の歴史的な背景」（金義煥 1979：112）を持つものであるかも知れない。だが、そのような近代化の上に成立した釜山において人々は、事実としてこの百数十年の間、暮らしを営んできたのである。港湾都市は海と港さえあれば成り立つわけではなく、そこに人々の労働や生活があってはじめて成り立つ。その基盤の上に、植民地化やそれに対する抵抗、朝鮮戦争の苦難、そして民主化運動などが展開したのである。そしてこの間、釜山は一貫して朝鮮半島随一の港町・東アジア屈指の貿易港であり続けてきた。

このような釜山の、現在に至るまで営まれてきた人々の生活の集積を、ナショナルヒストリーから相対的に自立した都市史として、もしくは地方史として、描き出すことはできないだろうか。一つの可能性として、筆者はその点を指摘しておきたい。

収奪と侵略のみで釜山を語ることができないように、抗日独立運動や民主化運動のみで釜山を語ることもできないし、また中央のナショナルな文脈において釜山を語りつくすこともできない。むろん、釜山はあくまで一つのケースに過ぎず、他の都市の事例研究とクロスさせる比較研究へと進む必要があるだろう。ただ、植民地都市というだけでなく、民主都市というだけでもない釜山の都市史・地方史は、文京洙が「周縁の歴史」という見方から取り上げる湖南（全羅道）や済州島（文京洙：2005）とはまた違った形で、「上から」また「中心から」語られるナショナルヒストリーに終始するのではなく、それ自体を対象化しうる「都市の歴史」研究の、新たな発展のきっかけとなる可能性を秘めているのではないだろうか。

文　献

（「*」が付いているのは韓国語文献）

* 金義煥（1973）『釜山近代都市形成史研究』釜山、研文出版社。

――――（1978）“日本の大陸侵畧期における釜山港変化の歴史的考察（上）”『帝塚山短期大学紀要――人文・社会科学編――』15,95-136.

――――（1979）“日本の大陸侵畧期における釜山港変化の歴史的考察（下）”『帝塚山短期大学紀要――人文・社会科学編――』16,73-123.

* 金永明（1999）『書き直し 韓国現代政治史』ソウル、乙酉文化社。

木村幹（2008）『韓国現代史』東京、中央公論新社。

* 高麗大学校と 4.18 編集委員会［編］（2001）『高麗大学校と 4.18』（非売品）

小林慶二（1992）『金泳三――韓国現代史とともに歩む』東京、原書房。
菅浩二（2004）『日本統治下の海外神社――朝鮮神宮・台湾神社と祭神』東京、弘文堂。
須山聡・鄭美愛（2006）“韓国における都市イメージの構成と形成過程――評定尺度と言語表現の分析――”『駒澤地理』42,11-35.
池明観（1995）『韓国 民主化への道』東京、岩波書店。
橋谷弘（1993）“釜山･仁川の形成”『岩波講座 近代日本の植民地 3 植民地化と産業化』東京､岩波書店。
―――（2004）『帝国日本と植民地都市』東京、吉川弘文館。
真鍋祐子（1997）『烈士の誕生』東京、平河出版社。
* 民主公園（2003）『民主公園とともにする釜山民主運動史』釜山、民主公園。
文京洙（2005）『韓国現代史』東京、岩波書店。
リンチ、ケヴィン［丹下健三・富田玲子訳］（1968）『都市のイメージ』東京、岩波書店。
（Lynch, K. 1960. The Image of the city. Cambridge, Mass. M.I.T. Press）
* 4.19 民主革命大邱 / 慶北同志会（2009）『大邱 4.19 民主革命――主役たちの回顧――』（非売品）

*「中央公園」ＨＰ http://www.jungangpark.or.kr/index.asp
* 釜山中区 文化観光 ＨＰ http://tour.bsjunggu.go.kr/00_main/main.php
* 釜馬民主抗争記念事業会史料編纂委員会（1989）『釜馬民衆抗争 10 周年記念資料集』
（ http://www.cyberhumanrights.com/media/movement/144_40.pdf ）
*「民主公園」ＨＰ http://www.demopark.or.kr/

注

[1] ただしリンチは、「そもそも、都市における意味の問題は複雑なものである。……都市についての個人的な意味は、その形態がわかりやすい場合でさえ非常にばらばらなので、少なくとも分析の初期の段階では、意味を形態から切り離してもよいだろうと思われる。したがって、この研究は都市のイメージのアイデンティティとストラクチャーに集中して進められることになる」と述べ、意味を分析対象から外している。

[2] 「釜山民主運動史」については、「民主公園」のホームページから見ることができる（ http://www.demopark.or.kr/ 最終確認 2009.10.01）。節単位では完結していない部分があり、誤植も目に付くなど、若干の問題はあるが、それらは必ずしも全体的な論旨を不明確にするほどのものではなく、本研究の趣旨に沿ってテクストとして利用することは可能である。
なお､民主公園からは『民主公園とともにする釜山民主運動史』と題した書籍も刊行されているが、内容的には上記の「釜山民主運動史」と別物である。

[3] ただし戒厳軍については、デモ隊との衝突は慎重に回避された。

[4] 龍頭山公園は、1678 年に設置された草梁倭館があった場所であり、倭館設置と同時に創建されたとされる龍頭山神社が日本統治時代にかけて存在していた（菅 2004:169-172）。現在は釜山タワーと李舜臣の銅像があることで知られている。

[5] この当時、釜山地区の戒厳軍の責任者であったのが、翌 1961 年に 5.16 軍事クーデタを引き起こす朴正熙であった。

[6] 『高麗大学校と 4.18』によれば、同じ 4 月 18 日に「高麗大学校学生一同」名義で出された「高大学生時局宣言文」中にも、スローガン 5 項目の中に「馬山事件の責任者を即時処断せよ」という一項が見える（122-123 頁）。

[7] 現代韓国における「烈士」とは、おおむね「国のために不当な権力と対峙して非業の死を遂げた者」といった含意が込められた表現である。韓国における「烈士」の生成に関しては、（真鍋：1997）が詳しい。

[8] なお、ここで大邱において一言しておく。「4.19」当時は野党の支持基盤であった大邱であるが、翌 1961 年の朴正熙の「5.16 クーデタ」以降、大邱・慶尚北道（ＴＫ）地域は、3 代にわたる軍出身大統領（朴正熙･全斗煥･盧泰愚）の地元として、長らく政権与党の強固な支持基盤であり続けた。したがって「2.28 大邱」は、大邱の都市史・都市イメージにおいては相対的にマイナーな地位を占めるにとどまっているのである。

[9] 「釜山民主運動史」は、第 6 章「新軍部体制下 1980 年代釜山地域民主化運動」の冒頭で次のように述べている。だが、釜山地域の民主化運動史の記述として完結しようとする意図は理解するとしても、釜馬民主抗争と光州事件との間の政局的な連続性を考えれば、1970 年代と 1980 年代とを分断するこの記述は、いささか問題のある表現だと言わねばならない。

> 1970 年代韓国の民主化運動が 10. 16 釜馬民主抗争によって時代的課題を完結することができたとすれば、1980 年代の民主化運動は歴史に長く燦然と輝く 5.18 光州市民抗争とともに悲劇的に始まったが、釜山地域の粘り強い闘争に力づけられて、ついに「6 月民主抗争」と労働者大闘争で爆発し、韓国民主主義発展に画期的な転換点を用意することになる。
>
> （第 1 節「概観」）

[10] もちろん、これは印象論としてのイメージの問題であって、事実としての民主化への貢献度の問題ではないし、釜山の民主化運動自体や金泳三自身の問題だと言い切ることもできない。例えば木村幹は、金大中と金泳三のこの時期の境遇の違いについて次のように述べている。

> 一九八七年の民主化――それはたしかに民主化を求める数多くの人びとの勝利の結果だった。しかし、そこにいたる過程で、最も重要な役割を果たした人物を一人だけ挙げるなら、ここでもやはり金泳三であろう。なぜなら、朴正熙政権から全斗煥政権と続いた二代にわたる権威主義政権を相手に、国内で最も直接的な運動を行ったのは、彼だったからに他ならない。
>
> 朴正熙政権下の金大中拉致事件や、全斗煥政権下の死刑判決に見られたように、たしかに金大中は金泳三より、ときどきの政権に警戒され弾圧された。金大中はだからこそ活動の手足を縛られ、直接的な活動ができなかった。厳しい軟禁生活や、獄中、あるいは亡命下での生活。全斗煥政権下の二度の「嘆願書」に典型的に表れたように、生き残ることにさえ精一杯だった金大中に、できることは限られていた。
>
> それに対して金泳三には、一定の活動の自由があった。二代の権威主義政権は、金大中と金泳三という二人を等しく弾圧することにより、国内外から批判を浴びることを警戒した。だからこそ、彼らは二人のなかから、金大中を主たる弾圧対象に選び、金泳三には限定的ながら一定の政治活動の場を与え続けた。そのような意味で金泳三は権威主義政権によって「選ばれた」挑戦者であり、彼はこの「選ばれた」闘争に勝利した、といえる。（木村 2008：195-196）

[11] 実際にソウル顕忠院には、1980 年の光州鎮圧作戦で亡くなった国軍将兵も「戦死者」として埋葬されている。

[12] http://japanese.bsjunggu.go.kr/02_introduction/history.php（最終確認 2009.10.01）
引用に際しては、地名の表記等に若干の修正を加えている。

[13] もちろん釜山も韓国第二の都市である以上、ソウルと同様に、「多くの都市イメージの要素がひしめき合ってナショナルヒストリー的な要素が前面に出てこない」という前者の事例として数えることは可能であろう。ここで想定した両ケースは、決して相互に排他的な関係にはない。